

## 巻頭言

日比野克彦（熊本市現代美術館館長）

### ■ クラウドファンディングによるリニューアルの効果

#### ART LAB MARKET

月に2回ほど美術館や市の仕事をするために熊本を訪れるのですが、空港からのバスを降りて、信号を待っているときに見上げると、大きな窓に貼られた「ART LAB MARKET」のカッティングシートが見えて、来たなという気持ちになります。

熊本市現代美術館は独立した建物ではないので、どう美術館をアピールするかは建築家の西澤徹夫さんや美術館のスタッフと何度も話し合い、受付の場所やショップ、カフェだった場所の佇まいや関係を変えることができたと思います。

2023年度はART LAB MARKETで様々な活動をおこないました。外から見ても何かあるな、やっているな、というのが見える活動を更に増やしていきたいなと思っています。

#### アートコミュニケーション

もともと、東京都美術館（以下、都美館）ではじめてアートコミュニケーター（アートを介して、人と人、人と作品、人と文化をつなぐ人材）の育成事業には、美術館の魅力を観客目線で発信していこうという役割がありました。都美館は基本的に貸し館なので、独自の魅力が必要だったというもあります。一方、岐阜県美術館の場合は郊外なので、美術愛好家以外の人にも来てほしい、新しいアートの見方をしてほしいという思いでアートコミュニケーターの育成事業をはじめました。取手の場合はまちの魅力発信を目的として、NPO法人と東京藝術大学が連携してやっていて、アートコミュニケーターの役割というのは、実はそれぞれ異なります。

熊本の場合は、既にまちの中にアートコミュニケーターのように自ら活動している人達がたくさん居るので、敢えてアートコミュニケーターの育成は行わないことにしましたが、今回、新たな場所としてできたART LAB MARKET をより活発に躍動させていくにあたって、この場所と、館内と他のスペース（ホームギャラリー、まちなか子育てひろば、ミュージアムショップなど）やその場所に居るスタッフとを繋ぐ役割のアートコミュニケーターの育成を検討してみても良いかもしれないと考えています。

## ■ 展覧会について

### CAMKコレクション展 Vol. 7 未来のための記憶庫

私のヴェネチア・ビエンナーレに出品した作品も出品してもらいました。アーティストが過去の自分の作品とじっくり向き合うという経験は、実はあまりありません。久しぶりに見て、その当時のことを聞いてもらうことで、「あ、そうだった。こうやってつくったんだ。」という記憶がよみがえってきました。当時の展示方法など、どれとどれを背中合わせで展示したか、そのときの気持ちなども思いだして、言葉にすることができました。

現代美術の作品は、インスタレーションとして制作、展示することが多く、きちんと記録が残せないことが多い。作品から読み取る情報はもちろんですが、その作品が美術館のコレクションとして収蔵され、改めて展示されるときに、現存の作家がいるなら、もう一度その作品について話を聞く。それによって、その作家の人となり、作品の記憶が積み重なっていく。コレクション展にはそんな意義があるのだと思います。

### 動画クリエイター展

エンターテインメント性の高い、美術館としてはかなり挑戦的な展覧会でした。

体験型ということで、熊本市役所のご用聞きや、東京藝術大学と熊本市が行う職員研修プログラムDOOR (Diversity on the Arts Project) でも活用してみました。

この展覧会の記録を10年後に見ると、このころの動画の状況はこういうものだったと振り返ることができるのかもしれません。

### 遠距離現在 Universal/Remote

作家達から生まれてきた作品とコロナ禍という状況によって立ち上がった企画による展覧会。国立新美術館と一緒に挑戦する姿勢は全国の美術館が見ていると思います。

今回、盲目の美術鑑賞家の白鳥建二さんとの鑑賞会なども行いましたが、実は現代美術の王道の展覧会は、対話型鑑賞にすごく向いています。なんだろうなというものや、知らない価値観に出会いたい人が多いかどうか、自分たちで新しい価値観を見つけに行こうと自然に思う風土か。これには土地柄や地域性もあります。これから熊本にも知らない価値観、新しい価値観をおもしろがれる人をもっと増やしていければと思っています。

### 第35回熊本市民美術展 熊本アートパレード

昔に比べると、ものを作る人が減った印象があります。会場にぎゅっという密度ができるくらいに応募数を増やしたい。例えば、ART LAB MARKETで年間を通して市民美術展のテーマを公表して常に作品を募集するとか、20名くらいの単位で展示作品をつくるためのレクチャーや

ワークショップをするなど工夫して、ものづくりをする人が増えるきっかけをつくっていきたくたいです。

## ミュシャ展 マルチ・アーティストの先駆者

この展覧会の人気の理由は、きれいなものをみるだけではなく、この時代の社会の政治的なこと、産業的なことといった、知的欲求を満たされる楽しみなど、半分は博物館的な要素にあるのかもしれませんが。

アールヌーヴォーは、アートが世俗と繋がっていく時代です。それまで宮廷の壁画に飾られていた絵画が町場に展開していき、ある意味、アートが個人ではなく大衆の見る目を気にするようになる時代とも言えます。

「アールヌーヴォー」という名前がつくことで、その時代のパリにおけるアートの役割が価値化されたように、名前がつくことで、そのものの価値が定まるということは、アートに限らず今の社会でも見られることかもしれません。

## ■ 熊本市文化顧問

4月に熊本市の文化顧問を委嘱されました。それまでは、美術館独自でやっていたご用聞きに加え、熊本市職員の研修や、東京藝術大学と連携した[DOORプロジェクト](#)なども実施しました。

文化顧問になったことによって、市役所により深くコミットすることになり、2024年度には熊本市第8次総合計画の展覧会も開催することになりました。

この連携体制については、他都市の行政や美術館などからも高い評価の声を聞いています。これから、文化顧問の活動の実践の場として、ますます行政と美術館の連携を強めていきたいと思っています。

## ■ これからに向けて

2023年3月に国は、[国立アトリサーチセンター](#)を立ち上げました。このセンターは、アート振興の新たな拠点として、アートの持続的な振興の原動力となり、アートの社会的価値の向上に貢献し、アートを通して私たちだれもが新しい価値や可能性を見出せる未来をめざして活動しています。

一方、今年度は改めて、地域の美術館としての、熊本市現代美術館の運営状況や指定管理者制度の課題を目の当たりにし、関わることになりました。今後、地域の美術館の現状と課題と展望について自分たちで分析し、課題をあからさまにするために、国立アトリサーチセンターなどにも働きかけてシンポジウムを行いたいと思います。

私たちは、美術館が展覧会や対話型鑑賞、ショップのセレクトまで、同じ目的を持って同じ方向にむかっているのかを常に考えていかなければなりません。美術館で働く誰もが同じビジョンに向かっていくために分析や議論を進めながら、開館25周年に向けて、私自身の言葉で熊本市現代美術館のめざすところを改めて明文化し、これからの美術館について発信していきたいと思っています。